

人類最強の人間inアインクラット

彼女の浮気話調べたら自分の母だった人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

両津勘吉がVRMMOをやるそうです

目次

V R M M O ! の巻	1
ホルンカの町! の巻	4
初のボス討伐! の巻	7

VRMMO! の巻

亀有公園前にある派出所、そこで二人の警官がある話をしていた

「先輩！手に入れましたよ!!」

「おお！本当か、本田！」

「はい！」

「なんだ？あれは？」

「あれはナーヴギアですね」

東京都葛飾区亀有公園前派出所、その警官達がある話をしていた

「ナーヴギア？」

「はい、世界初のゲームの中に入ることが出来る機械です」

「ふん！所詮はゲーム機だろう」

「そんなことないですよ！部長」

「仮想世界は医療等にも使われる凄い技術ですよ」

「これを作った茅場晶彦さんは凄いのよ」

「本田！ワシが先にやってもいいか！」

「はい！いいですよ！」

「よっしゃ！」

そして両津は、そのまま休憩室に行き、ログインの準備をした

「よし！これでいけるな！」

「リンクスタート！」

「両ちゃんだめええええ!!!」

麗子の悲痛な叫びと共に、両津はソードアート・オンラインの世界にログインしてしまった

★★★

「おお！これがゲームの世界なのか！」

両津は感動していた

世界初のVRMMOである、しかも初回スロットがたったの一万本だったのにも関わらず、このゲームを買うことができたのだから

……実際に買ったのは本田だが

「よし！アバターも問題なし！」

両津のアバターはリアルの姿と殆ど同じだった

「とりあえず武器買って、レベルアップするか！」

★★★

二時間後

「よし！これくらいでいいか！」

あれから二時間、両津はずっとモンスターを倒していた

そしてレベルが四あがっていた

「そろそろログアウトしないと不味いな……ん？」

両津はログアウトボタンを探す、しかし、見あたらない

設定画面にも、装備画面にも、操作方法の画面にも、

ない

「バグか……これは？」

ゴーンゴーンゴーン

「なんだ?!」

鐘の音が聞こえ、そうしたら始まりの町の広場に転移していた

「なんだこれ?」「運営修正かくしろよ」「おっおっおっ? イベントかお

?」「ヤらないか」

等々、広場は騒がしかった

そして、空が赤く染まった

「なんだあれ」

そして、赤い液体が落ちてきた

それはローブを着た……というかローブその物だった

「私の世界にようこそ」

「私の世界い?」

「ログアウトボタンが無いことは既に知っているだろうが、これは不具合ではない

繰り返し、これは不具合ではなく、このゲームの本来の仕様である

諸君にとって、《ソードアートオンライン》はもう一つの現実とい
べき存在だ。――

ヒットポイントがゼロになった瞬間、諸君のアバターは永久に消滅
し、同時に

諸君らの脳は、ナーヴギアによって破壊される

そして、これをプレゼントしよう、確認したまえ」

「なんだこれ……手鏡？」

両津がそれを取り出して見ると、突然光った

「うわー！」「すごいおっおっお」「お前女だったのか！」「お前こそ男だっ
たのかよー！」

見ると、回りも光っており、姿が変わっていた

「それでは、諸君の健闘を祈る」

「おっおっお、これは凄いことになったお」「ふざけんな！おれこれか
ら用事あるんだぞ！」「畜生！明日結婚式あげるのに！」「やったぜ！
これで毎日ゲームしほうだいだ!!」

プレイヤー達の悲痛な叫び……中にはこの状況を喜んでいるも
のも居るが

「やってやらあ!!こんなゲームすぐにクリアしてやる!!!」

そして両津も、このデスゲームをクリアしてやると、やる気に溢れ
ていた

ホルンカの町！の巻き

「ここか…。」

「ーここはホルンカの町、愛と、絶望溢れる町（嘘）」

見た目はファンタジー世界にあるような物である。

とてもじゃないが、これがゲームの世界だと、信じられそうに無かった。

「ん？」

見ると、一人の少年が、村人に話しかけていた。

そして村人の上にあるマークが、？から！に変わっていた。

「少年！」

「うお！」

そして両津は、そのまま肩を思いつきりつかんだ。

そしてそれに少年は驚く。

当たり前だ、誰だつて知らない人に肩を掴まれたら、驚くに決まっている。

「今のはクエストか？」

「え？、あ、はい、そうですけど…。」

「そうか！ところで、お前さんの名前は？」

「え、あ、キリト、デス、はい」

「どうやら彼は、コミュ症らしい。」

「そうか！ワシはリョウツだ！よろしくな！」

「どうでもいいが、両津の名前プレイヤーネームはリョウツである。

そのままである。

「え、あ、よろしく… え?!あなたが有名なりョウツさんですか?!」

「お！ワシのことを知ってるのか！」

リョウツというプレイヤーは、何気にゲーム業界では有名である。

曰、ダンジョンを一人で攻略したとか。

曰く、誰も倒せなかったボスを一人で倒したとか。

曰く、余りのゲームバランスに、そのゲーム会社に行き、リアルファイトしたとか。

等々、(いろいろな意味で)有名である。

ーその後、色々ありキリトと友人関係になったリヨウツは、キリトと一緒に、『森の恵み』という

植物型モンスターの胚珠を集めるというクエストを受けたのだった。

「オラア！」

リヨウツの声が響く。

あその後、クエストを受けたリヨウツ達は、クエストのアイテムを落とすリトルネペント

を倒して回っていた。

「よし！あと一つだな」

「凄いですね、リヨウツさん……」

「なあに！ワシにかかればこんなもんよ!!」

ワハハハハ、とリヨウツが笑う。

しかし、ここに、一つの絶望が訪れた。

「キシヤアアアア!!」

「なっ！」

「にっ?!」

ーエリアボス、ビックネペントである。

サイズはリトルネペントの十倍程はあるだろう、しかも触手がある。

ウツボットのような見た目をしている。

ハッキリ言おう、キモい。

「アワワワワワワ」

そしてキリトは、恐怖に陥り、

「スゲエ！」

リヨウツは何故か感動しており。

「キシヤアアアア!!」

「リヨ、リヨウツさん！逃げましょう！」

「なあに！ワシに任しとけ！」

違う、そうじゃない。

そう言いいなくなるのを必死に我慢するキリト。

そしてリヨウツは、いや、両津は笑った。

「こないいい経験値、逃してたまるか!!」

「エエ?!」

「ーさあ、絶望ゲームの始まりだを。」
う

初のボス討伐！の巻

「オラア！」

「グギア！」

剣を振るう度、触手が切られていく。

一刀両断。

そんな、レベル十にも満たないプレイヤーが、ボスを倒した。

「凄い……」

素直な称賛が、キリトの口から漏れでた。

それもそのはず、レベル生RPGではレベルが絶対であり、十レベルも離れていては絶対に覆せない差となる。

そしてリョウツは、やったのだ、そんな離れ技を。

リョウツの今のレベルは五。

それに対し、ビックペネントのレベルは一五だ。

なぜ、リョウツがこんなことができたのか、それはこのゲームーソードアート・オンラインが

VRMMOだったからだろう。

通常のゲームでは、どうしても自分がしたいように操作できない。

剣で斬ろうとしたら、そのまま振るうことしかできないし、特定の行動しかできない。

しかし、VRMMOなら、自分が動かしたいようにできるのだ。

リアル
現実の様に。

……まあこれは、両津が地獄を乗っ取ったり天国支配するなど、色々なことをしていたのが原因かも知れないが。

「やったなーキリト！」

「え、ええ」

フィナーレがなり、リョウツ達にレベルアップを知らせる画面がある。

見ると、リョウツはレベル十二に、キリトは十になっていた。

ゲーム開始初日で十までいくとは、やはりリョウツ異常だ。

しかもデスゲームになったゲームでやるとは、やはり、異常だ。

★★★★★

——とところ変わって警視庁。

そこでは、東京都葛飾区亀有公園前派出所に勤める大原大次郎、中川圭一、秋本麗子が、

警察庁長官と、茅場晶彦、そしてSAOについて話していた。

「では……両津勘吉はSAOの中に？」

「はい、仕事申中だというのに、ログインし……」

「そうか……」

なにやら考えている警察庁長官。

しかし、顔は明るかった。

なぜなら両津勘吉は、良い意味でも悪い意味でも、有名なのである。そして彼は、両津勘吉という存在——いや、この世界について知っている、数少ない人間だ。

というのも、この世界には魔法やら地獄やら天国やら神様やら、宗教家が知れば阿鼻叫喚の図ができる

であろうことを知っているのだ。

「しかし……彼だけでは不安だ、彼等にも動いて貰おう」
「なっ——」

念には念を、と彼等を動かす決意をする警察庁長官。

「し、しかし彼等は——」

「心配ない、大丈夫だ」

「警察庁長官、それに僕も——」

★★★★★

——と、リアルが動き出した時、件の両津は——

「おいおっちゃん！もつと酒くれ!!」

「酒じゃねえ！エールだバカ野郎！ホラよ!!」

「サンキュー親父！」

　　ー酒を飲んでいた。

浴びる程。

さあ、これからどうなるか、実に見物だー